

互いのまなざしが響き合う学習
一人一人の
確かなみとりと支援によって

CONTENTS

教育研究会より	1・2
らいぶ インタビュー 「和歌山大学学長に聞く」	3
学習紹介：「おはなしづくりであそぶ 模倣運動」(体育科)	4
学習紹介：「異学年がかかわる授業」(算数科)	5
学習紹介：「何が食べたいの What do you want?」(英語活動)	6
学習紹介：「話し合いの学習場面で音読記録を効果的に活用して読み深める」(国語科)	7
学習紹介：「ジオボードで創る図形の学習」(算数科)	8

教育研究会を終えて



研究主任 志場 俊之

昨年度から定着した土曜日開催。期待と不安が入り混じる中、今年も、600名を超える方が参会してくれました。多くの方の視線を受けながら、本校研究会を開催できたこと、厚くお礼申し上げます。

本年度は、「互いのまなざしが響き合う学習」という研究主題を掲げ、サブテーマを「一人一人への確かなみとりと支援によって」として、研究を進めてまいりました。

年度当初から、研究主題についての共通理解を図るため、教科部会や校内研、学年会など、さまざまな機会を捉え、研鑽を積んでまいりました。

本研究会で紹介した単元の学習では、当日まで、子どもの学習や子ども自身をしっかりとみとりながら、このみとりを生かし、どのように支援をすれば子どもどうしの学び合いを響き合いへと高めることができるのだろうか、悩み続けました。そうして、書き上げた当日資料は、わたしたちの渾身の力をふりしぼった結果であります。

午前中、のべ23の教室で、個性ある教師の個性あふれる授業を提供することができたと自負しております。

それらの授業に対して、多くの参会者の方から忌憚のないご意見をいただくことができました。

また、記念講演をしてくださった佐藤学先生からも、期待と共に、「附属学校としての使命を果たし、これからの学習の方向も見据えた新しい学習のあり方を模索しながら、授業提案をしていってほしい。」という主旨のあたたかい励ましのお言葉もいただきました。いただいたご意見やご指摘、アンケートの内容を真摯に受け止め、今後の研究に生かしていきたいと考えています。

研究会を終えて、年度当初から目指してきた「互いのまなざしを聞き合い、学び合い、響き合う学習を通して『意味と内容』の獲得を目指すと同時に、その過程において、創造的に思考する力や的確に判断する力、豊かに表現する力などの主体的な能力を育む」ことに、手ごたえも感じ取ることができました。そして、より質の高い授業を作り上げるという点で、粗削りながら、現時点では満足のものとなりました。

しかし、佐藤先生からご指摘のあった、「授業の成立」と「学びの成立」の違いについて、もう少し意識する必要があるように思います。多くは語られませんでした。が、「授業の成立」という教師の側に立った見方の、より質の高い授業やより深みのある授業を目指すという色合いが、わたしたちの指導には強く出ているのかもしれない。「学びの成立」という、子どもの側に立った見方で考えれば、佐藤先生のおっしゃる、「どの子どももジャンプできる授業」がよく理解できます。

そのためには、「響き合う学習」を目指す前提としての、聞くことの大切さや聞き合える関係作りを、なお一層、学級経営における重要な課題として位置づけることが必要であると実感しました。

どの子どもも授業に参加し、どの子どもも課題に対して積極的にアプローチを繰り返す、そして、自分の力で学び取ったという喜びを実感できる「学びの成立」を目指した授業を作り上げるよう、努力していきます。そして、それが、より質の高い、深みのあるものになるよう、これからの研究を進めて参ります。

ありがとうございました。

らいぶ★レポート

国語科は、2年・3年・4年・5年の

国語科

各学級において、学習課題に沿って子どもたちが関連し合いながら考えを伝え合う授業を見ていただきました。協議会でいただいたご意見を今後活かしていきます。ありがとうございました。

6年理科では「電気と磁気との出会いから生まれる感動」

理科

4年理科では「温度による体積変化から生まれる感動」といった子どもの感動体験を大切にしながら楽しく問題解決に取り組んでいく子どもたちの姿を見ていただきました。皆様方からいただいた貴重なご意見をこれからの研究にいかしていきたいと思ひます。

日本の味、「ごはん」と「みそ汁」のよさについて考え話し合いました。

家庭科

今まで何気なく食べていた「ごはん」と「みそ汁」を中心とする和食には、驚くべきパワーがいっぱいだったこと、私たち日本人の体にぴったりの食事であること等。協議会では貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

今年度は「全体学習につながるひとり学習の充実をめざして」をテーマに研究をすすめてきました。

社会科

研究発表会では、6年「会社を経営するとき大事なことは何だろう!」、5年「洗剤から世界が見える」という単元で、一人ひとりのまなざしを大切にしながら学習に取り組みました。

(文節歌唱法)のもとになった昨年度5年生「曲想を感じ取ろう」の実践成果をもとに、本年度は、「ことば・動き・音」を関連づけて音楽の基礎・基本を育てる」を主軸に研究実践を行った。

音楽科

(コードネーム)に着目すること「和音(Chord)の響き」を取り上げた。協議会では「知識(knowledge)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」をパランスよく育てることを提案した。

算数科では本年度「子どもがなげける算数科学習～思考の「ずれ」を意識して～」というテーマに研究を進めてきました。

算数科

2年・3年・4年・6年で子どものずれを意識しながら授業を進めました。協議会ではたくさんの示唆あるご意見、ご助言を頂きました。今後の研究に活かしていきたいと思ひます。

子どもたちの生活の身近にあるよう

生活科

で意外と見つからない「石」。「石」を「たくさん」「高く」積んだり箱の中から、見つけたい石を取り出す「石あてゲーム」をして、石の特性に気づいていきました。子どもたちの遊びの中にも石が登場するようになってきました。

本年度の体育部学ぶには、のもと、

体育科

「もほう・ひょうげん～うみのなかをたんけんだ」と「とびばこあそび」を行いました。サブテーマの「学びあえる学習集団を考える」によって、子どもたちは意欲的に運動にかかわり、楽しさを十分に味わいながら学習をしていました。

第1校時目では低・中・高の3学級それぞれに国語・算数・理科を、第2校時では複式全児童による縦割り班活動「きょうりょくプロジェクト」を見て頂きました。2時間がんばった分、47人の子どもたちに先生も含めた50人みんなで、研究テーマである「個と個がつながる主体的な複式の学び」を実現できたと喜んでいす。

複式

授業では、子どもたちが「英語って楽しいな。」と思える活動を、歌・手遊び、チャンツ、ゲームなど多様な活動を組み入れながら展開することができた。協議会では、小学校教員をはじめ、多様な職種の方が参加下さり、活発な意見交換が行われた。

英語活動

和歌山大学教育学部附属小学校への期待と課題

佐藤学(東京大学)

和歌山大学教育学部附属小学校への期待は3点です。第1は「協同的な学び」の推進です。

そのためには、授業ヴィジョンの転換、グループ学習の活用、教室の改革をすすめることです。

第2は公立学校のモデルスクールを目指すことです。そのためには、先見性と先端性を有する21世紀型の学校づくり、30人学級の実現、プログラム型からプロジェクト型の学習の構築が必要です。

第3は大学と連携した教職専門開発学校をめざすことです。

今日、授業を参観し研究協議、研究発表をうかがいましたが貴校の課題としては以下の5点です。

第1は「21世紀型の学び」への授業(研究)の改革、

第2は教師の居方(ポジショニング)と関わり方(聴く、つなぐ、もどす)、

第3はグループ活動の組織と位置づけ、

第4は授業の事例研究を「授業」から「学び」へ転換すること、

第5は学校経営の改革(学びの専門家としての教師=学びの組織としての学校)です。

なお、早々に松浦校長から丁寧なメールをいただきましたが、当日はこちらこそ勉強になりました。貴校の挑戦、少しでもバックアップしたいです。(2006年10月30日)



小田 章 先生 和歌山大学 学長 (専門分野: ドイツ経営学, 企業体制論)



前号では、小田先生の教育に対する熱い思いを紹介しました。本号では、専門分野から教育に生かせるお話を紹介させていただきます。

教師には「理と情」のバランスが肝要！！

小田: 理とは理性のこと、情とは情愛や優しさなどのこと。私は理が3分で情が7分位がバランスが取れていると。日本の組織は、古来から情優先の組織だったんですね。情には、理や利では計り知れない人と人との本当の結びつきがあったわけです。それが日本の組織の特徴であったわけですが、戦後その情の部分がどんどん少なくなってきましたね。理性で判断することは悪いことではないですが、あまり利にこだわりすぎると人間関係がぎくしゃくするし、それが更に進むとエゴイズム、自分のことしか考えないことへと繋がって行くわけです。先生でいうと、子どものことを考えるより自分を優先すると言うように！最近そうした風潮が強くなってきているように思いますね。当然、人間はまず自分を大事すること、これが肝要です。しかし、学校の先生というのはそれに固執するとあきませんわな。自分の身近にいる生徒達がどうなるのかということ考えた上で、自分の利を追い求めること、それが先生なんだと思います。企業は自己利益の追求が目的です、しかし、それが過ぎると、組織破壊を来すことがあります。そのためある程度の規制が必要になります。その企業で働く人々は、原則自分の仕事を一生懸命すれば、企業の業績が上がり、その結果として昇進・昇給という自己利益を獲得することができます。従って、企業の場合、一人一人が自分のためにがんばったらええと言っているんです。その意味では利己主義になっても良いのではと。そのコントロールは企業それ自体がするわけですから。学校の先生にもそうした面はありますが、自分先生もマネジメントの勉強を！

小田: 小学校の先生もマネジメントを勉強する必要があるね。私の専門なんだけど、これがなかなか難しい。自己管理も難しいですから(笑)、他人管理は本当に難しいですよ。

山中: 私もまだまだです・・・

小田: それもね、相手が子供達だから、先生方は頭で理論を習得しても役に立つかどうか疑問なんです、基本的なことをまず学んでおけば、現実起こる状況は様々ではあるけれども何とか対応できると思うんですよ。

例えば、子ども達をマネジメントするのに加点主義でいい場合と減点主義でやった方がよい場合とがある。管理する側の心得というものが、どういう方法を選択し、活用していくかがある程度理論的に学ぶことができる。

のためにがんばることが子どもにとって良いことでなければなりません。ここに企業人との違いがあると思いますね。先生は、生身の、それも未完成だけど果てしない可能性を持った存在物である子供達との対話ですから……。自分のことを一生懸命考えるということはいいいことやけど、日本の組織には昔から情、つまり相手を慮る心、心情というもんが強くあって、なりたってきたので、それを頭に描いて、相手と対話すること、例えば、自己を犠牲にしても優先的に子供達のことを想うこと、それが学校の先生ではないですか。情を持って接すれば、必ず子供達は応えてくれると思いますよ。私なりの「先生の理想像」ですわ。

山中: がんばります。

小田: 小学校時の子供達の教育はほんまに大切。このままやったら日本はおかしな国になるような気がする。大学での教育では遅すぎますね。だから、山中君はじめ先生方に大いに期待していますよ。

山中: だから小学校の教員としてのプレッシャーは大きいです。

小田: ただ、社会というか、保護者の皆さんの学校教育への期待が薄れてきていると違いますか。多くの子供達が塾へ行き、知識偏重主義の状況になりつつありますわな。知識は大事やけど。でも知識だけでは頭でっかちになってしまう。何が大事って、それをいかに生かすかということが大事。知識詰め込み教育はただの博学者を養成するだけ。役に立たんことはないけど、大きく社会に貢献することがない。知識をいかに活用し、動かすかということ、私は、

学校をマネージメントする先生は一度経済学部でマネジメント専門にしている先生の講義を受けてみるのも良いんじゃないかと思いますよ。また、そうした先生方と小学校や中学校でこうやというケースを通じて勉強するのも良いですね。

附属小でもうちの先生たちとマネジメントの勉強会を開くということをする方がいい。これが、すぐに役に立つとは思わないけど、こういうケースやったらあの理論をこう使えばいいというようになるんやないか。でも、そのベースになるものがなかったら手の打ちようがないわけですからね。

これがほんまに大事やと思いますね。人が集まれば必ずマネジメントが必要となってくる。マネジメントとは管理や。ものや人などの管理、特に人の管理が一番大事

これは知恵と呼んでるんですが、それを先生方は知識教育とともに教える必要があるんだな。知識と知恵はちがうことを認識し、工夫をすること、そこに頭を使うことを教えて欲しい。それと、小さい子供さんの場合、体で覚えることが一番。基礎的なことは、頭ではなく体で覚えるように指導すること、これがもっとも肝要やね。体で覚えたことはそう簡単には忘れないからね。そして、応用は頭で！

一回でダメなら、2回やる、がんばろう、とにかく繰り返し繰り返しやれば、自然に身に付く、これで身に付いたことは決して忘れない。頭で、ぱぱっとやったことはすぐに忘れる。特に低学年のうちは、体をつかってやるべき。それはその子にとって将来ものすごいプラスになると思う。教育に対する私の持論です。

山中: やはり、相手(子ども)のことを考えてやるとうすべきだと思います。

小田: そう。それは子供達も苦しいよ。同じことを1回で済ますのではなく2回3回やるということやから。子どもに理解させるのは難しい。根気強くやるしかない。そこで手を抜いたら先生も楽、子どもも楽やけど、長い目で見たとき大きな損失や。先生としたらあのときさせてやらなかったという悔いが残るし、子どもにとったら全然身に付いていない、気がついてからやっても何十倍という時間が必要であり、できるかどうか分からないとなってくる。低学年のうちはやっぱりどんどんやらしていくべき。先生の責務やね。

です。どういう策でやるのか、先生は日々の活動の中で体得されていると思いますが、原理原則や、リーダーシップのあり方等について学ぶべきやな。

勉強しに講義を聴きに来はったらいいですね。

山中: はい。

小田: 教育学部の学生さんも、今開放していているので是非聞くべきだと思いますね。意欲の問題やね。こういう勉強していたら、人の管理上のセオリーやどんな原理原則があるのかを知ることができ、状況に応じてさまざまな工夫が生まれてくると思う。

大事な子どもさんをあずかっているわけやから、先生の仕事というのはほんとうに大事ですよ。可愛い子供達のために先生方の奮闘を期待したいですね。

紙面の都合ですべて掲載できず残念ですが、他のネタとして「試行錯誤するものづくりへ」「肌と肌とのふれあいを」「あいさつ運動」「40人学級への苦言」「若いうちは買ってでも苦労しろ」、さらに野球ネタでは雑談を含めてかなりのお話をさせてもらいました。本当にありがとうございました。

「聞き手: らいぶ編集部 山中 昭岳」

おはなしづくりであそぶ 模倣運動

～ 「うみのなかをたんけんだ」 (1年生) ～



体 育 科
1年B組担任
石本 倫章

本単元は模倣運動である。低学年の子どもにとって、変身ごっこやおままごとは大好きなあそびである。彼らのあそびをみていると、まさに他者になりきっている。それが、もし、授業でもできたら楽しい学習になるだろうと考え本単元を計画した。

本稿は、その手だてを中心に紹介することにした。右の資料は、カイヨワのプレイ論の中の「ミミクリー＝模倣・変身」の所である。

ロジェ・カイヨワとは、フランスの社会学ないし文化人類学者。

『おはなしであそぶ模倣運動』

右にあるように、模倣運動を続けていくエネルギーは「絶えざる創造」である。低学年の子のごっこあそびをみていると、なりきるためのストーリーが必要だと考え、おはなしづくりをしていくための学習を仕組んだのである。

ミミクリー

模擬，模倣，仮装遊び。略 プレーヤーは，自分の人格を一時的に忘れ，いつわり 捨てて別の人格を装う。他者になること，他者として通ることに開放の喜びがある。演者は一時現実の自分を忘れ，虚構の世界に遊ぶことになる。略

略 活動は自由であり，非生産的でもある。しかしながら，ルールをもたない。それは絶えざる創造であるから。虚構，想像，模倣がルールのかわりをする。

ミミクリーは一時的に他者になることであるが，ほんとうになることではない。略 つまり他者でないことを知りながら，しかもいかに他者らしくふるまうことがミミクリーである。この遊びであることの意識，さめた心が失われたとき，すなわち虚構と現実の間の境界が不明確になり，けじめが失われたとき，ミミクリーは変質し，墮落する。

引用文献 「プレイ・スポーツ・体育論」
竹之下休蔵 著

指導計画

	めあて1	めあて2
第1時	おはなしをつくっておどろう	(第1時はめあて2はしていません)
第2時	うごきのことばをしるぞ	グループでおはなしをつくっておどるよ
第3時	うごきのことばを言いながらおどろう	ペアグループで見合いっこしよう
第4時	グループで合体してもいいよね	つくる おどる つくる おどるを繰り返す
第5時	ことばをいれるとおはなしがふくらむね	効果的な言葉が大切だ

《第3時でつくったおはなし》
うなぎがのんびりおさんぼをしています。そこへ，サメがやってきたので，大いそぎでにげた。

《うごきのことば》
ニヨローニヨローニヨローニヨロー，“うわーサメだ。”シューシューシューシュー

《指導上の留意点》
・ うごきのことばは，何度も繰り返す。
・ つくる おどる つくる おどるを繰り返す
・ めあて2で，毎時間，違うおはなしをつくってもよい。
・ 走らないおはなしを考える。

題材とおはなしの内容

模倣運動は，題材設定が大切だとよく言われる。今回の題材は，うごきの工夫を高めるためには子どもに合っていない。それは，対象物のことを知らないからである。しかし，おはなしを続けていこうとする子どもたちには合っている。

おはなしの内容は，走り回るようなおはなしづくりをさせないことが大切だ。それは，他者になるきる自分が薄れてしまうからである。走り回ることは，「自分に戻ってしまうこと。」だということを指導すると，わかりやすく，おはなしづくりを楽しめていく。

異学年がかかわる授業

複式中学年における共同の学習



算数科
3・4F担任
坂本 桂

1 本学級の子どもたちとグループ学習

本学級の子どもたちは、中学年らしく活発で、好奇心旺盛です。授業中も自分が主体となり発表する活動を好む傾向にあります。学習活動に積極的である反面、学習の進行をリードしたいという主張どうしがぶつかり合ってもめることや、友だちの発言に対し最後まで聞かずに質問や意見を述べようとする様子をよく見かけます。

このような実態をふまえ、子どもたちが小集団内で相互にかかわり合い協力し合いながら学習を進める「共同学習」を積極的に取り入れてきました。複式で学年別に学習する際にも、両学年で共通の課題を学習する際にも、4人グループで学習する場面を多く取り入れています。研究発表会で講演された佐藤学先生も「グループは4人が最適」と言われていました。本校複式学級は各学年8名ずつの16名。4人グループを構成するには最適です。

2 グループ学習を取り入れる場面

グループでの学習を取り入れる場面は、子どもたちが一人では解決が難しい課題のとき、協力しないとできない課題のときなど、さまざまです。2学年に共通の課題の際には縦割りの4人グループ、学年別の課題の際には各学年2つずつのグループで学習します。

一斉学習では意見が言いにくい子や話を聞き漏らしやすい子、前時の学習を忘れた子も、グループの中では発言したり質問したりしやすいのが最大のメリットです。「わからないことを聞きやすい」ような環境設定が、学びには不可欠です。

このようにして自分の考えを伝えたり異なる意見に耳をかたむけたりすることによって、思考が深まります。

この学習においては、教師の言葉数よりも子どもの言葉数の方が圧倒的に多くなります。また、学習を進めていく中で、子どもたちは協力が上手になっていきます。特に「かさ」や「長さ」など「量と測定」の単元においては、かさや長さを正確に測る「決め手」となりました。



3 異学年でも「共同」を

2006年度研究発表会においても公開した「長方形と正方形」「三角形」の単元では、「四角形を二つに切ったらどんな形ができるか」を考える3年生と、「同じ形の三角形を二つ組み合わせるとどうなるか」を考える4年生とが、発見したことを互いに交流しあう場面を取り入れました。一人ひとりが気づいたことを、学年ごとのグループで交流し合い、それから3・4年合同の場面での発表にうつりました。



3年生からは、「二つの四角形になった」「三角形と四角形ができた」「三角形が二つできた」などの意見が出されました。4年生からは「ひし形ができた」「いろいろな角度ができた」「大きな三角形になる」などの意見が出されました。次時にも話し合いは持ちこされました。

「四角形は、むき合っている角を切ったら、三角形になるから、四角形はいろいろな形になるんだとわかりました。(3年女子)」

「3年生と交流したので、四角形と三角形の事が、前よりももっとわかりました。

四角形から三角形を作る事などは、前まであまり考えていなかったもので、べんきょうになりました。(4年女子)」

この感想からは、自分とは異なるものの見方に出会って、学びが深まった様子が見てとれます。実際に授業の中では自分の発見を相手に伝えるために、図形の構成要素をふまえた説明をする様子も見られました。このように、異学年の交流による学びの可能性を探っているところです。

何が食べたいの？ What do you want?



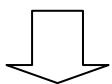
英語活動
2年C組担任
辻 伸幸

英語活動の研究テーマは、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行い、伝え合う喜びを味わえる学習」であるが、低学年は、このテーマに結びつく素地を養うことにした。具体的には、次の3点である。

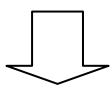
- A 英語活動で歌ったり、踊ったり、クイズをしたり、伝え合ったりするなどして、楽しく活動でき、「英語って楽しいな。」と感ずることができる。
- B 児童にとって身近な生活の英語（動物、食べ物、スポーツ、曜日、虫、おもちゃ、色、形など）に十分、慣れ親しみ、聞いて理解できる。
- C 英語に特有の音声、リズムやイントネーションに十分、慣れ親しみ、まねることができる。

ある英語活動の授業1時間の流れに沿って、上記の3点を紹介したい。

ウォームアップ



慣れる



伝える

【ウォームアップ】上記の観点A,Cに関連

単元が食べ物であったため、ウォームアップも当然、食べ物に関連するものを行った。“Acca bacca soda cracker”, “Hot cross buns”, “Ten fat sausages”の3曲である。これらは、リズムよく手遊びや動作とともに表現できる歌であり、子どもたちは全身を使って楽しめた。普段とは違う学習の始まりであり、英語を使う雰囲気づくりにもウォームアップはとても大事である。

【慣れる】上記の観点B,Cに関連

ここでは、授業で使わせたい英語の単語や表現を、単調な繰り返しではなく、電子音楽キーボードに入っているリズムを使ってチャンツを行った。16ビートのリズムを用いた。

リズムの速さを変化できるので、子どもたちは、飽きることなく今日使う表現や単語に慣れることができた。



英語って、楽しいな。

I want.....
BEEF.

【伝える】上記観点Aに関連

コミュニケーション活動の一つであるゲーム活動で実際に今日の表現“What do you want?”, “I want ~.”を児童たちは使った。

英語を使ったカードゲーム遊びである。学級の友だちと出会ったらじゃんけんをして、敗者は、勝者に“What do you want?”と尋ね、勝者は、“I want pizza.”などと答え、敗者がそのカードを持っていれば、それを勝者に渡すゲームである。最後に何枚カードをためることができたか、その数を教師が尋ねた。

子どもたちは、いきいきと活動し、今日の表現や単語を遊びの中で触れることができていた。子どもたちは、遊びの中で学ぶことも多いと考えている。英語活動には、特に遊びを組み込んでいきたいものである。なぜなら、「英語って楽しいな。」と思える子どもたちを理想の姿としているからである。遊びを通して、十分、「英語って楽しいな。」と感じていることが授業後の振り返りから読み取ることができた。以上のように、子どもたちは、無理なく日本語以外の言語（英語）に触れ、親しむことができています。

What do
you want?



子どもの感想

- ・一番よかったところは、インタビューゲームです。友だちにちゃんと聞くことができたし、とくにやさしく聞くことができました。
- ・けんかをいつもしているけれど、きょうはたのしくできてすごく良かったです。

話し合いの学習場面で音読記録を効果的に活用して読み深める ～ IC レコーダー を活用して～



国語科
5年A組担任
須佐 宏



1学期は文語詩の朗読に挑戦

低・中学年における国語教室では、元気のいい読み声を聞くことが多い。しかし、高学年の国語教室においては、音読が軽視されている現状がないだろうか。私は、高学年の国語教室においても「音読することを楽しむ環境を作ること」「聞き手を意識して読ませ、朗読に挑戦させること」「音読を効果的に活用して読み深めること」を大切にしたいと考え実践に取り組んでいる。今回は、上述のうち、「音読を効果的に活用して読み深めること」の有効性について、実際の授業場면을交えながら述べる。

本学級においては、春以降、音読をテープにとって聞き返すなどの実践に取り組んできた。10月に行った『わらぐつの中の神様』の学習では、さらに利便性を高めるためICレコーダー（SANYO ICR-S250RM）を導入し、授業における話し合いの場面で、必要に応じて会話文の音読や場面音読を取り入れて聞き返し、表現と理解を融合させながら読み深めることにした。



教室に設置したICレコーダーとスピーカーシステム

一の場面の学習より（一の場面におけるマサエの様子について）・・・段落「そんなの迷信でしょ、おばあちゃん。」という言葉をとらえて、「マサエは神様を信用していない。」「おばあちゃんのいうことを全く信用していない。」という読み取りをしている子が大半であった。そんな中、ある児童が、「おばあちゃんの話に興味がある。」と読み取っていた。授業では、その子の発言を受け、「なるほど。」というつぶやきも聞かれた。それでも大半の児童が「マサエは関心がない。」と考えているようであった。そこで、段落におけるマサエの言葉「わらぐつの中に、神様だって。」と「そんなの迷信でしょ、おばあちゃん。」について、希望者を募って音読記録をとり、聞き返した。「わらぐつの中に神様だって。」を「だってえ。」と「え」付きで読んでいた子は、「え」がついてないことを指摘された。また、「そんなの迷信でしょ、おばあちゃん。」は、「でしょう、」と「う」を付けて読んでいる子がおり、「う」がないことを確かめた。そうして、それぞれ「え」や「う」を付けずに本文に即して音読していた児童の音読が支持され、再度聞き返した。「そやな、全く興味なかったら聞かんもん。」という発言があり、これまでの様子から信用していないマサエの様子と、少々興味を持っているマサエの両方がわかるので「半信半疑」と押さえた。

研究発表会当日・・・研究発表会当日の公開授業では、「話し合いの場面で、必要に応じて会話文の音読や場面音読を取り入れる。」という考えから、括弧付きで（・声に出して読むこと、聞くことを通して、読み深めることができる。）を本時の目標のひとつにかけかけていた。本時は、三の場面におけるマサエの様子について話し合い。ある子が、自分のおばあちゃんの話であったことに気づいたマサエの様子をとらえた「マサエは、パチンと手をたたいて、目を輝かせました。」の「目を輝かせた。」とはどういうことなのかを質問した。ある子が、「実演する。」と言い出し、みんなでその子の実演を見守った。てっきり目を見開く様子をするものだと思っていたのだが、その子は、行動描写の前にある「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。ーあっ。」という台詞を交えながら手をたたいて実演した。その様子を見た子どもたちは、マサエの喜びが、「こんな素敵なお話の二人が自分のおじいちゃん、おばあちゃんであったことへの喜び」であることに気づき、「希望に満ちあふれたまなざし。」という発言も聞かれた。この子が行った実演は、まさに「声に出して読むことを楽しんでいる姿」であったし、その様子に見入っていた子どもたちは、「見ることも聞くことを通してその場面の様子について読み深めている姿」であったと思う。今後も日々の学習に音読を取り入れながら、音読の有効性について研究を続けていきたい。



研究発表会当日も、実演入りの音読を披露

らいぶ★スクエア

ジオボードで創る

図形の学習

算数学習で思考力を高める



算数科
4年A組担任
岡田 明彦



ジオボードは、アメリカで広く使われている学習具です。図形領域の学習を中心に用いられます。実物は、正方形の板にペグと呼ばれる釘が打ち付けられてあり、そこに輪ゴムをかけて形を作ります。手作りでもできますが、危険のないように釘に注意してください。教具として販売もされています。本校には17.5cm四方の板に6×6(36)や7×7(49)の穴のあいたものがありました。釘のかわりに、金属やゴムの鉸やビスを使います。カラー輪ゴムを使うとカラフルでわかりやすくいいですね。

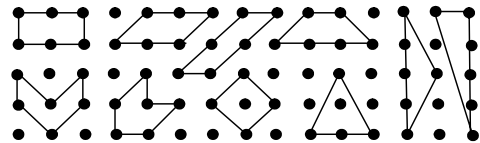


夏季教科別研修会

量と測定

『面積』 『2cm²の形作り』

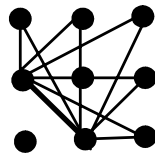
輪ゴムを引っ張ってピンを付けていく、作っては考え、考えては作っていく。ななめの線うまく使えばたくさんできることに気付いていく。



教材・教具の特性を活かして

図形

『二等辺三角形づくり』『三角形』
二等辺三角形や正三角形のなかまわけの後、自分の板に二等辺三角形をどんどん作っていく子どもたち。色を変えて輪ゴムをかけていくなかで自然と性質を考えていく。



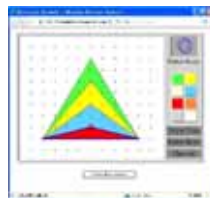
『三角形の整理』

正方形にならんだ9つの点から3点を頂点とした三角形は何通りできるか？三角形を作りながら同じところを見つけて、辺に着目して帰納的に整理していく。



でじたる版

ここにあるジオボードは、アメリカのNCTM(全米教師協議会)のサイトにあるもので、マウスを使って実物のジオボードと同様な活動ができるようになっています。



<http://www.esensei.ne.jp/~InternetMath/nctm/goeboard.html>

その他使える教具

- ・パターンブロック
- ・ポリドロン(立体)
- ・ジオマグ(立体)



From Editors

寒さも厳しくなってきました。2006年もあとわずかです。HPではカラーで紹介していますので是非ご覧ください。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

Fax (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp